名人豐澤團平の談話（二）

左東流水編

鰕を酒でいはす團平の計略見事に効を奏し二代目廣助は團平に對し下の如く語つたのである。

無茶を彈いて鼻高々、その鼻を打折つて眞實の藝が知りたい……と。其熱心だけでも感心だから敎へて遣らう實は己も中年過るまでは知らなかつたが綱大夫（團平の彈きし綱大夫の先代にて名人の聞え高き人なり）の相手で千本の道行を彈いた事がある、初日に彈いて仕舞つて樂屋に行くと突然お前は何を彈くのだ彼樣な道行があるものかと二日續けて劍突を喰つたがサア判らない自分は道行を彈いて居る積りだから恰好貴樣が己れに小言を云はれる樣なものだ、其所で兜を脱いで綱大夫さんに秘傳を聞いたのだ、スルト怖いもので其の明くる日に遣つて見ると其時の人形遣は吉田辰五郎と云つて名代の名人だが樂屋へ來て私に向ひ今日は何したのだ昨日とは丸で違うぜ、彼樣にやられるなら何故此間から彼の通り彈いてくれなかつた今日は實に樂々と人形が遣へたと吃驚りされた事がある、夫で己は知つて居るのだが貴樣の心掛が感心だから敎へて遣らうと云つて其席で敎へてくれました、其後私が道行が彈いた事がありましたが其時忠信の右の手を遣つて居たのは今の玉造の伴玉助でしたが樂屋へ來て昔から殘つて居つた手の型は今まで何しても三味線と合なかつたが師匠の三味線で始めて合ひましたと云つて感心して居た事があります、はア其道行の秘訣ですか、是れは困りましたね、口では云へない事ですから、

つまり以心傳心で心から心へ傳へるのですね、さうですな早くいへばまア矢張り情とでもいふものでせうね、其後素人ですが、堂島に居るスミコタといふ妙な字のデン〳〵好がありました、初代鶴澤文三是は古今の名人で今でも三味線に文三張といふ張形が殘つて居る位です、其人の弟子に今津といふのがありましたが器用ではないけれども師匠の敎へられた通り少しも我流を交ぜない人でスミコタは此人から習つた詰り文三の孫弟子です、是も師匠から聞いた通り一點も違はず覺えた人で日頃今の三味線は彈くのでない觸つて居るのだ、大夫さんも語るのでない唄つて居るのだと藝道の浮氣になつたのを嘆いて居るとの話を或人から聞きましたから、夫は面白い人だ逢つて一ツ聞いて見たいと申込みますと團平さんが聞くのなら支度をして置かうと云つて二三日手馴しをしてから逢つてくれましたから、彈いて貰つて聞いて見ますと自分の覺えた所と餘程違つた所がありまして、第一聲の遣ひ方といふのは中々大事なもので此奴を知りませんと自然無理な遣ひ方をするから直ぐ咽喉を潰して仕舞ます呼吸さへ知つて居れば其樣に馬鹿高い聲を出さなくともお客樣の腹へピンと響かせる事が出來るのです、詰り聲に餘裕を付けるのですな、關羽が八十二斤の青龍刀を自由に振廻して動くのは自然二三百斤の重量を振廻す力があるからで、幾干動いても勞れません、八十二斤だけしかない力のものが八十二斤のものを振廻した日には直に腕が鈍つて仕舞ひます、能く今でも大夫さん方が語り乍ら拍子扇を無暗に打て首を振廻したり延上つたりしますが、彼は聲の遣ひ方を知らない苦し紛れに遣るので詰り餘裕がないからです、其所で私がスミコタの彈語りに我々の習らつた所と違がつて居る所があるから兩方を折衷したらもう一ツ面白い事があるだらうと考がへまして夫からいろ〳〵工風をしました末漸々發明をしまして裏撥を遣かふことなんぞも段々會得しました、はい其裏撥といふ事ですか、是も困りますな、まづ早くいへば舞臺を彈くことです、此の舞臺を彈ぐといふのは六ケ敷い事で幽靈が出れば其幽靈が恨みがあるとか戀しいとか出るには出るだけの理由があるのだから其舞臺を見て其理由を音色に出すのです、夫に就て今の人形遣の玉造さんを成程名人だと感心した事がありましたよ、私が春大夫さんを彈いて居た時でした、大夫さんも知らなかつたのを玉造さんが團平さんは裏撥を彈くと云ひ出しました、是が分るといふのは餘程藝の妙に到らなければ出來ないことです、又能く素人方は調子がシツクリ合つたなぞと喜ん

で居らつしやいますが、淨瑠璃と三味線とシツクリ合ふ様なことでは何うも眞正の甘味は出ませんね、尤もカラツきり合はない様な事ではお話になりませんけれども、三味線の方は進む淨瑠璃は退さる又淨瑠璃が進めば三味線は退さる、双方互違ひになつてキユツと引張る所が何とも云はれない味はひのある所ですな、ヅン〳〵三味線に付て來られては根ツカラものになりません、所謂放縱にして規矩に外づれずといふ所ですな、自體此の音曲といふものは妙なもので、物を感じる時には丸で嘘だと思ふ程恐ろしい力のあるものですよ、私の三味線で玉造さんの腹帶を切つた事がありました、慥か千本櫻三の切鮓屋の場の權太の這入の所で「お里は取付兄様是は一生の私が願ひ見逃してくださんせと頼めど聞かず跳飛ばし、大金になる大仕事邪魔ひろぐなと縋るを蹴飛ばし撲り飛ばし最前置きし銀の鮓桶是忘れてはと引提げて跡を慕ふて……」茲です、茲が眼中人なしといふ所で、私の眼の中には見物もなければ舞臺もありませんウンと滿身の力を下ツ腹に入れ無念無想でテンと打付けると玉造さんの腹帶がプツフリ切れました、今でも寄合ひますと其話をする事がありますよ。

又此の氣合といふものは不思議なものですよ、能く昔の劍客が氣合でもつて相手を倒ふすといふ事を云つて居ますが、嘘ではなかろうと思ひますのは三味線にも爾いふ事があるのですよ、三味線を抱へて撥を打付る時は度度申しました通り眼中に見物を置かず、又舞臺も置かないので有りつたけの力を兩方の腕に込めるのです、所謂鞍上人なく鞍下に馬なしといふ氣組ですな、夫で撥を打付ると同時に左の人差指で絃をキユツト摺下ますと其氣合で棹へ摺跡が付ます、棹と申しました所が紫檀のコウキ（俗にちゞら杢といふ）と云て一番堅い所を選らむのです、只の紫檀でさへ彼の通り石見た様な堅木ですのに其中の一番堅いのですから幾千力を込ても高が爪で摺下るのですから中々杢目の艶でさへ消されさうもない譯ですが、其所が氣合ですな、一の絃は爾でもありませんが二と三は鐵道線路の様に平行線になつて溝が堀れるのです、私共のは一ケ月と同じ棹を用ゐられません、其溝へ絃が嵌つて音色が出ませんから、削らせては取替々々用ゐて居ります、又餘り氣合が乘りますと跡が付く所ではない棹の割れる事がありますよ、丸で嘘の様ですな、私が東京の猿若町へ出て居た時でした、廿四孝の四段目で例の通り一心になつてキユーツと摺下げますと轉手から二寸ばかり下（コハリの壺）の所から棹が殺げました、サ

ア指が痛くて彈けませんから樂屋から小刀を取寄せて殺げた所を切つて仕舞ひ、漸々彈き終りましたが、其後も度々こんな事がありますよ、デスが誰君も眞實になさいません、既に熊本へ參つた折などは其の話が出ますと或方は馬鹿を云へ其樣な事があるものかと大層お怒んなすつた御人がありましたが、同じ一座の方でお心得のある方でせう、イヽヤ無とは云へぬ既に武術の方でも氣合が籠れば木刀で首の斬れる事もあるからと云つてくだすつた事がありました、夫で此の右の腕は撥を握りまして自然力の入れ方が烈しいものですから發達も違ふと見えまして左よりは餘程大きく隨つて筋肉も締つて居ります、（此時同人は左右の腕を編者に示せり）ソラネ違ひませう、丸で不具見た樣ですな、是に就て可笑話がありますよ、恰好私が姫路に參つた折でした。少し風邪氣になりますと連て行つた弟子衆が心配をしてくれまして如何にも風邪は大事のものだ、得て是から肺病などに變じますから葛根湯や何かの姑息療治をしないで病院に這入つたら宜らうと勸めますので、私は左したる事ではなからうと思ひましたが、折角心配してくれるものですから勸めに任せて病院に這入りますと院長さんが、私の脈を見ながら貴君は何流をお遣ひになります、イヽヱ御隱しなさいますな僕も若い頃は中々好きで少しは心得がありますと頻りに尋ねるのです、能〳〵く聞いて見ますと右の腕が割合に大きいものですから竹刀を握つたものと察したので私が三味線彈の圖平だと申しますとア、爾だつたかと大笑になつた事がありました。

私は常々新作ものを遣つて見たいと思ひますよ、なくなつた愚妻は少しかぢつたものですから私が節付をして樂しんで居ましたが今は其の樂しみがありません、何か貴君方もお作をなすつたら如何です、イイヱ御相談には幾干でも乘ります、はい此節付けといふのは中々六ケ敷いもので一ケ所を付損なひますと全篇がくだらないものになります、是にはいろ〳〵法があるのですが、隨分此節では妙な節付が見える樣です、作者の腹になつたら、ア、書いたのではなかつたなぞとこぼしていらつしやる方もあるでせう。云々

* * *

* * *

* * *